

●文学の部
・第一発表

ファンタジーという名の教育
—『オズの魔法使い』と新たな楽園の創造—

日本大学文理学部准教授 堀切大史

アダムとイヴが神に背いたことによりエデンの園という楽園を失って以来、楽園という概念は、古今東西の芸術作品においてさまざまな形で描かれてきた。それは例えば、英国の詩人ジョン・ミルトンによる楽園文学の正典ともいべき叙事詩『楽園の喪失』が、英国国教会を清めようとしたピューリタンたちによる宗教改革運動を背景としていたように、それぞれの国や時代における社会的な状況が反映された形で描かれてきたと言えよう。そしてまた、現実の世界とは異なる想像の世界という意味で、楽園は、ファンタジーというジャンルの形をとって描かれてきたとも言えよう。例えば、アニメーション映画やディズニーランドをとおして世界中の人々にとっての楽園となっているウォルト・ディズニーの世界は、現代においては、もはやファンタジーの代名詞とすらなっていると言えよう。ミルトンの『楽園の喪失』からディズニーのファンタジーへといたるさまざまな芸術作品において、楽園の概念が再創造されてきた背景には、当然のことながら、現実の世界に満足できない人が多くいたり、楽園を必要としないほど現実の世界に満足している人が少なかったりすることがあるわけだが、現実の世界と異なっていれば何でもよいわけではないという意味で、楽園の世界が必要とされてきたのは、「現実の世界」対「想像の世界」という二項対立的な問題を解決することだけが理由であるようには思えない。そこには、そのような二項対立的な問題とは別の、積極的な意味で現実の世界を生きていくために必要な、いわゆる「人生の教科書」となるような何かがあるはずなのだ。そして、そのよい例となるであろう作品が、ミルトンの『楽園の喪失』という楽園文学の正典を継承しつつ、ディズニーのファンタジーへとつながる作品となっている、ウォルト・ディズニーの先達ともいべきライマン・フランク・ボームによるアメリカのファンタジー小説『オズの魔法使い』である。ボームは序文において、『オズの魔法使い』を、「新しい不思議物語」と呼んでいる。そしてそれは、どうやら、教育の問題と関連しているようである。楽園とファンタジーの関連性を探りながら『オズの魔法使い』という「新しい不思議物語」について考察したい。

・第二発表

権力の限界—個人・社会・倫理の交錯する場としてのシェイクスピア劇

日本大学法学部教授 松山博樹

本発表は、ウィリアム・シェイクスピアの劇作品における「権力の崩壊」という主題を検討対象とする。取り上げるのは『リア王』と『リチャード三世』という二つの作品であり、両者は構造や人物像において大きな相違を示しながらも、いずれも権力が内部から揺らぎ、最終的に維持不能となる過程を描き出している。この比較を通じて、シェイクスピアが提示した権力の脆弱性と、その普遍的意味を浮かび上がらせたい。

考察にあたっては、既存の政治思想史的研究や心理学的解釈を参照しつつ、それらを単に並置するのではなく、多層的かつ相補的に組み合わせることを重視する。具体的には、権力の二重性をめぐる視点、社会的関係の脆弱性を示す視点、そして個人の内面的葛藤に注目する視点を織り交ぜ、それぞれが互いを補完し合う理論的枠組みとして構築する。これにより、シェイクスピア劇における権力崩壊を、部分的説明にとどまらず、総合的かつ説得力のある形で浮かび上がらせたい。さらに、権力の崩壊が単に制度の問題や心理の問題として理解されるのではなく、両者が交錯し、相互に作用し合う動態として捉えられる点を明確化することを意図している。

本発表の目的は、二作品を比較することで、シェイクスピアが単に王権の失敗を劇的に表現したにとどまらず、権力そのものが抱える構造的な脆さを描き出したことを明らかにする点にある。その脆さは、制度的基盤の不安定さ、社会的信頼の断絶、そして心理的欲望の暴走といった多様な要素の交錯から生じるものである。結論部では、このような分析を現代社会に引き寄せ、権力の成立条件と限界に関する普遍的な示唆を提示したい。

セット形成による構造構築の可能性：制限的關係節を事例に

日本大学文理学部准教授 高橋洋平

Chomsky (2024)において、人間の思考を階層的な言語システムによって生成する I 言語の基礎的性質として、「すべての構造関係および構造構築操作は思考と関係しており、概念意図システムで解釈される意味的性質を伴う」と定義する原理 T(Principle T)が提唱された。その帰結として、言語表現を生成する基礎的な構造構築操作である併合(Merge)、および併合によって構築された統語構造は、その都度 Θ 理論と作用しながら思考と関係づけられた意味解釈を持つことが示唆される。

近年の論考では、構造構築操作とは本質的に言語体から集合を形成するセット形成 (Form Set)であり、これに二進性や Θ 理論が課せられることで、従来想定されてきた併合に相当すると考えられている。したがって、上述の原理 T が支持されるのであれば、セット形成およびその適用によって形成される構造についても、思考と関連した意味的性質を伴うことが予測される。しかし現時点での検証はリスト構文 (list-construction) に限定されており、十分とはいえない。

そこで本発表では、このセット形成による統語派生のさらなる可能性について、高橋 (2023) および Takahashi (2022, 2024a, 2024b) の一連の論考に基づき検討を行う。具体的には、一致分析と繰上げ分析の競合を許容する見解が依然として優位である関係節構文を取り上げ、効率性に代表される第三の要因を遵守したセット形成による関係節主要部と関係節 CP の構造構築案を提示する。これにより、関係節内外に偏在する関係節主要部のコピー認定や、繰上げ分析が直面する不適切移動 (Improper Movement) の回避に対して、自然な説明が与えられることを主張する。

・最終講義

文法化研究と私：木を見て森を見る研究をめざして

日本大学文理学部教授 保坂道雄

英語の文法化現象に取り組んで約30年、文法化研究の重要性を近年あらためて感じている。本講義では、「文法化とは何か」を出発点に、その実証的及び理論的研究の側面を概観しながら、「文法化 (Grammaticalization)」についての本質的な議論を深めていきたい。

まず手始めに、中高の授業でも扱われる英文法の多くの現象（冠詞、接続詞、関係詞、助動詞、進行形、完了形等）が、英語の通時的過程の中で生じた文法化の結果であることを観察し、そこには共通するメカニズムが存在することを確認する。具体的には、冠詞の存在意義や進行形の be 動詞や完了形の have 動詞の起源、助動詞 do の出現などを取り上げ、英文法の主要な要素がどのような過程を経て現代の姿になったのかを考察する。

また、こうした文法化現象は近年の生成文法や認知言語学の研究においても主要なテーマとして取り上げられているが、その議論には相容れない部分があり、こうした両言語理論による説明は実はコインの表と裏の関係にあることも論じる。言語には「思考の言語」と「伝達の言語」という2つの側面があり、前者に焦点をあてる生成文法と後者を重視する認知言語学との観点の違いである。しかしながら両側面が言語の総体を形作っている点が重要であり、両言語理論の接点を探る。さらに、「ことばの進化」の視座からも、文法化はその中心的役割を果たしており、文法化を経ることにより文法を有する人間言語が誕生したとも言える。

なお、こうした研究を遂行するためには、地道な言語資料分析と言語を俯瞰的に見る研究の融合（「木を見て森を見る研究」）が必要であり、こうした文法化研究が新たな言語研究の発展の契機になればと願うものである。